

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 分裂構文に関する日中対照研究
—構文文法のアプローチから—

氏名 楊 竹楠

論文内容の要旨

本研究は、認知言語学における「構文文法」というアプローチに基づいて、中国語の“...的是...”と“...是...的”両分裂構文を日本語の「...のは...だ」分裂構文と対照しながら、日中両言語の分裂構文の機能領域、同一の使用場面における構文の選択傾向、他構文と共起する場合の構文的拡張を考察したものである。以下、各章の論旨を略述する。

第一章では、世界の諸言語における焦点化の研究を出発点とし、情報構造をコード化する一つの手段として、英語、日本語、中国語に共通して存在する構文形式である分裂構文を提示した。英語の「It 分裂文」と「Wh 分裂文」の研究を踏まえ、従来の諸言語における分裂構文の研究では分裂構文は統語的、語用論的な観点から多く検証されてきた。しかし、中国語の研究では、分裂構文を二つの形式の構文として扱わず、“是”と“的”を独立した構成要素として扱ってきた。すなわち、従来の中国語の研究では、“是”と“的”が表すそれぞれの意味、文中の役割についての語用論的研究が主に行われてきたため、構文そのものの性質はあまり明らかにされてこなかった。また、中国語と他言語の比較を行う対照研究、言語間の普遍性とバリエーションの両面を解明する言語類型論においても、分裂構文を対象とする研究は多く見られない。とくに、二つの構文が機能面、談話面において、お互いにどのような関係を持っているかという点に対しては検証の余地が多く残っている。この理由で、通言語的研究において分裂構文を機能・認知的観点から再考察する必要性があると考えられる。

本研究の研究対象は、中国語“...的是...”構文と“...是...的”構文、日本語の「...のは...だ」構文である。この三つの構文は分裂構文のプロトタイプ的な構文だと考えることができる。また、近年中国のインターネット上で多く見られる“...的不是...是...”という、分裂構文と他構文が共起した、プロトタイプ的な用法ではない、新しく生まれた拡張的構文も考察対象に入れた。

第二章では、分裂構文の研究が盛んに行われている英語の研究に基づき、統語的観点、語用論的観点、認知的観点という三つの観点から、分裂構文を考察した先行研究を概観した。通言語的に分

裂構文の生成方法を見ると、構造的には、中国語の“…是…的”構文は「It 分裂文」、 “…的…”構文と日本語の「…のは…だ」構文は「Wh 分裂文」と類似性が見られる。一方、語用論的観点からは、分裂構文における焦点部分の情報構造について多く論じられていた。特に、英語と中国語は、二形式の分裂構文を持ち、焦点部には旧情報か新情報が現れることによって、分裂構文の選好性に大きく関与していることが分かった。このように、構造だけでなく、談話機能からの分裂構文の考察においても、中国語の“…是…的”構文は「It 分裂文」と類似しており、“…的…”構文は「Wh 分裂文」と同様の機能を持つことがわかった。一方、日本語の「…のは…だ」分裂構文においても統語的特徴と情報構造的な特徴を考察したところ、英語の「It 分裂文」と「Wh 分裂文」の両方に共通する意味構造を持つことが確認された。以上、各言語の分裂構文に構造上、談話上の類似性が見られたことから、日中両言語における対照研究の可能性を提示した。先行研究の概観を通して、分裂構文の研究では、統語的研究と語用論的研究が主であり、認知言語学の観点からはまだ検討の余地があると考えられる。また、個別言語の研究、特に英語の研究は進んでいるものの、中国語では構文としての研究がまだ少ないことを明らかにした。また、中国語と他言語の分裂構文の対照研究においても何らかの理論に基づいて体系的に分析が行われるものは多くないことがわかった。中国語の分裂構文は、“…是…的”構文が一般的に構文として扱われているが、もう一つのタイプである“…的…”構文に関する研究が少ない。このため、“…是…的”と“…的…”の両構文が互いにどのような関係を持っているかは明らかにされておらず、他言語と対照をする場合、構文の全体象が見えにくくなっている。そこで、本研究では、認知言語学の構文文法のアプローチに基づいて中国語の分裂構文を“…的…”構文と“…是…的”構文の二形式に分類した上で、日本語の「…のは…だ」分裂構文と対照しながら考察を行うことにした。

第三章では、本研究が援用する理論を紹介した。本研究の理論基盤は、Goldberg (1995, 2006) が提唱した「意味と形式の結合体」という構文の理論である。また、構文と構文間の関係、その構文が持つ特性を動機づける継承関係によって構築された構文の間のネットワークという見解を援用する。さらに、本研究では、具体的に分裂構文を考察する際に、言語類型論の視点から Luo (1994) の分裂可能性階層を踏まえ、中国語と日本語のそれぞれの分裂可能性階層がどこまで及ぶのかを提示した。加えて、語用論の観点も応用し、「話題継続の原則」と分裂文における「間主観性」の特徴に基づき、同一の談話場面における日中両言語の分裂構文の選好性を分析した。

第四章から第六章までは、コーパスから具体例を通して、日中両言語における分裂構文の対照を行った。具体的には、分裂構文の機能領域、談話機能の観点から見る分裂構文の選択の差異、分裂構文における構文的拡張という三つの面から展開した。

まず第四章では、中国語の“…的…”分裂構文と“…是…的”分裂構文を、日本語の「…のは…だ」分裂構文と対照し、三つの構文のスキーマを考察した。考察の方法として、中日対訳コーパスを用いて、抽出した例から、“…的…”分裂構文と「…のは…だ」分裂構文、“…是…的”分裂構文と「…のは…だ」分裂構文の対応関係を考察し、焦点化要素の相違を見つけ出した。具体的には中国語の“…的…”構文と日本語の「…のは…だ」構文は構造的に類似しているものの、時間や場所的要素の焦点化、理由節の焦点化、行為（事象）全体の焦点化という三つの場合、それぞれ中国語の“…的…

…”構文における名詞化辞“的”に機能上の制限が見られる。この制限により、“…的的是…”構文のスキーマ性は低く、分裂可能性階層も主語と直接目的語までに及ばないことが分かった。一方、コーパスから中国語の“…是…的”と“…的的是…”両分裂構文の焦点位置に生起する要素の分布を調べ、次に、出現頻度の高い要素を取り出し、日本語の対訳文と比較しながら分析を行った。その結果、中国語の“…是…的”分裂構文の分裂可能性階層は、直接目的語の焦点化が許容されず、主語の焦点化も制限されるという特徴が見られ、「モノ」の焦点化から「コト」の焦点化への拡張が見られた。このように、中国語の両分裂構文は機能領域が異なり、相互に役割を分担する関係となることが分かった。さらに、日本語の「ノダ」構文との対照を通じて、“…是…的”構文は「モノ」の焦点化から「コト」の焦点化への連続性が見られることを明らかにし、中国語の両分裂構文の関係を構文の継承リンクで示した。

次に第五章では、同じ談話場面における分裂構文の選好性について検討した。対訳コーパスには、同一の談話場面の文であり、日中両言語とも文法的に分裂構文が成立するような文であっても、一方の言語においては分裂構文が使われるが、もう一方の言語においては非分裂構文が使用されている場合があった。本章では、対訳コーパスの用例を調べ、日中両言語における分裂構文の選好傾向の考察を通じて、当該構文が両言語とも文法的に成立する場合、使用頻度および焦点化の要素によって相違が生じることを確認した。この相違が生じた要因を談話機能の観点から考察した結果、日中両言語の分裂構文における主題展開機能の相違と、間主観性の特徴という二つの要因によって、分裂構文を選択するか否かが決められることがわかった。まず、日本語の「…のは…だ」構文の機能は主語の焦点化が中心であり、中国語の“…的的是…”構文に比べて話題の継続・展開機能が発達していることが明らかになった。一方、中国語の“…的的是…”構文は目的語を焦点化するために多く使用されていた。この場合、SVOの語順に特に変更はないため、話題の継続・展開という談話機能より、「私事語り」を導入する機能も見られた。次に、間主観性が見られる中国語の“…的的是…”分裂構文は、日本語において「…のは…だ」構文分裂構文のほか、文末の「ノダ」構文にも対応することが可能である。この場合、聞き手への問いかけなどの役割を果たしており、分裂構文と「ノダ」構文に意味と機能上のつながりがあることが明らかとなった。最後に、中国語の“…是…的”分裂構文と日本語の「ノダ」構文の談話的類似性に着目し、中国語の“…的的是…”構文、“…是…的”構文は日本語の「…のは…だ」構文と分裂構文としてネットワークを成しているだけでなく、「ノダ」構文とも構文の継承リンクによってつながっていることを示した。

最後に第六章では、分裂構文と他構文が共起して生まれた拡張的構文を中心に検討した。“…的的是…”分裂構文が中国語の存在・所有を表す“有”と共起した“有的是”構文、および“Not X But Y”構文と共起した“…的的不是…是”構文の二つを挙げ、日本語の同様の構造を持つ構文と対照を行った。その結果、それぞれの構文において両言語に共通するプロトタイプの意味が見られる一方、拡張的意味は中国語にしか生じないことが分かった。中国語の“有的是”構文において、“有”構文の“主観大量”（話者の感覚において量が大きいこと）という意味を継承し、修辭的には「誇張法 (hyperbole)」が見られた。一方、“Not X But Y”構文と共起した“…的的不是…是”構文においては、「メタ言語的否定」と「転移修飾」により拡張が生じた。拡張の動機付けを分析したところ、中国語における分裂構文

の構文的ネットワークには、部分関係リンクとメタファー的拡張リンクによる拡張関係が存在し、修辞的新奇性を持つ構文が成立することによって、日本語に比べ構文的拡張が発達していることが明らかになった。

最後に第七章では本研究の総括を行い、認知言語学、中国語学、第二言語教育への示唆を述べた。

以上、本研究では認知言語学における「構文文法」というアプローチに基づいて、中国語の“…的是…”構文と“…是…的”構文の関係を明らかにし、日本語の「…のは…だ」分裂構文を加えてそれぞれの機能領域、同一の使用場面における構文の選好性、他構文と共起する場合の構文的拡張を明らかにした。

Goldberg (1995,2006) をはじめ、これまでの構文文法の研究が扱った構文は、主に英語の二重目的語構文、使役移動構文、結果構文、way 構文などであり、これらの構文については体系的な記述が行われてきた。しかしながら、分裂構文に関しては、各言語では談話機能の観点からは研究が進められていたが、構文文法のアプローチや中国語との対照研究は稀であった。構文は意味と形式の結合体であるという広義の定義から見れば、分裂構文は日本語においても、中国語においても、その形式は基本的に固定されたものであり、構文の定義に当てはまる。したがって、構文文法のアプローチに基づく理論は、本研究で取り上げた分裂構文とうまく適合し、日中両言語それぞれの分裂構文の特徴、構文間のつながり、または構文の多義性によって生じた構文の拡張を観察するのに有益であったといえる。また、第四章で扱った分裂構文の「分裂可能性階層」は、中国語の二形式の分裂構文の関係を明らかにしただけでなく、それぞれの分裂可能性階層を示すことによって、言語類型論の研究にも重要なデータを提示した。

一方、中国語学の従来の研究では、主に“…是…的”構文に関する記述しかなく、英語の「Wh 分裂文」、日本語の「…のは…だ」分裂構文と構造的に類似している“…的的是…”構文については、十分な記述・検証がなされてこなかった。そのため、本研究は、文の個別要素を検討するようなアプローチとは異なり、構文文法のアプローチを研究方法として、“的”が文中に生起する位置の相違によって生じる“…的的是…”と“…是…的”の二つの形式の分裂構文を取り上げた。また、第六章で挙げた拡張的構文の例は中国のインターネット上において流行している新しい言語事実であるが、構文の機能や特徴など記述的な考察だけでなく、構文文法のアプローチによって、確固とした理論に基づいて分析することができた。このように、中国語の二つの分裂構文のつながり、及び分裂構文と「ノダ」構文の関連性を見つけ出すことで、日中両言語の分裂構文のネットワークを構築することも可能にした。そのうえ、第二言語教育において難しい文法項目である日本語の「ノダ」構文について、「焦点化」機能という一つの側面から、中国人日本語学習者の日本語の「ノダ」構文への理解を深めることができると考えられる。